

## 海野十三『深夜の市長』

——〈深夜〉世界の光芒——

吉 川 麻 里

一

一九三〇年代も半ばに入り、時代はまさに探偵小説の全盛期を迎えていた。「小栗、木々両君の目ざましき擡頭を主軸として、既成、新進の活動があり」、「探偵小説雑誌の簇生を見、探偵小説の単行本や叢書の出版が驚くほど行われた」<sup>①</sup>のである。探偵小説といっても、この時期の探偵小説は、論理的な謎解きを主眼にするいわゆる〈本格もの〉から程遠く、むしろそれ以外の怪奇幻想性を主たる趣とする（変格もの）が主流であった。このように探偵小説が本来の謎解きをおろそかにして、エロやグロに流れてしまう風潮を危惧した甲賀三郎は「新青年」三四年九月号の「梅雨季のノートから」と題する評論で、探偵小説の範疇を拡大解釈することを戒めた。「探偵小説は断じて推理の小説」であって、探偵小説家の書くものがすべて

「探偵小説であるといったやうな偏見は止めて貰ひたいと思ふ」と（本格もの）のみが探偵小説であると主張し、「現在の日本の所謂探偵小説家は、全然探偵小説を書いてゐないと、ハツキリいへると思ふ」<sup>②</sup>と苦言を呈した。

翌月の同誌上「探偵小説管見」という一文で真つ向から甲賀に異議を唱えたのが、海野十三<sup>うんのじゅうぞう</sup>であった。甲賀とは正反対に「凡そ探偵趣味の入つてゐるものは全部これを探偵小説の名で呼んでいいのではないか」と探偵小説のカテゴリーを拡大した。「探偵趣味こそ面白いが、本格ものだけでは、一向面白くない」。それゆえ「探偵小説は、もつと勇敢に、新しい型を求め、此処ぞと思つう方向にドン／＼拡大してゆくのがよいと考へるものである」<sup>③</sup>と抱負を述べている。

海野の目指した探偵小説の「新しい型」とは、後年彼が開拓者と

されるところの「科学小説」であった。通信省電気試験所の研究員でもあった、科学者・海野は、科学小説の隆盛を願って、科学小説をも包含する（変格もの）を擁護したのである。彼は「科学小説の作り方」（無線と実験）<sup>36</sup>・1、9、11、12）という科学小説の創作論で「科学小説とは科学趣味を主調とする小説」と定義し、「科学小説である上に、事件の発生と、その解決が論理的になされて、謎の存在と、謎を解く興味とが併せ加わっている」「論理的科学小説」<sup>④</sup>に期待をかけた。海野は探偵小説の新しい型として「科学趣味」が中心となるような探偵小説を考えていた。「科学小説の作り方」の第一回の連載直後である三六年の二月から六月かけて同じ「新青年」に連載されたのが、初の長編「探偵小説」、「深夜の市長」であった。

「深夜の市長」は、昼間は司法官試験補・浅間新十郎、夜は探偵小説家・黄谷青二と、昼と夜で顔を変える「僕」が主人公である。

「僕」の最大の楽しみである深夜の散歩の途中で、偶然巻き込まれた殺人事件を追跡しようとして、深夜のT市を右往左往しながらも最後には市政を巻き込んだ一大汚職事件が明らかになる、といった内容である。主たる事件のトリックは、被害者の背後から投げられた短刀が、彼の抱えた磁石の磁力に引き寄せられ、背中に命中、という現実離れた幼稚なものである。確かに「科学趣味」を基調と

した作品ではあるが、彼のいう「論理的科学小説」としてはいかにもお粗末であった。

本稿では、持論の実践である「深夜の市長」が、「論理的科学小説」として失敗に終わっているとすれば、この作品の魅力はどこにあるのか、考察したい。また、「深夜の市長」は探偵作家としてデビューした海野が、後年少年向けの空想科学小説に転じる分岐点であるように思われる。併せて作品史的な位置付けを試みたい。

## 二

一九三六年三月号の、「新青年」の新聞広告では「深夜の市長」は次のように宣伝されている。

時あたかも総選挙、腐敗し切ったT都の市会を背景に、歎案と犯罪の大目附役を以て任ずる「深夜の市長」突如として現はる！ 新しいアルセーヌ・ルパン。（傍線引用者）<sup>⑤</sup>

続いて五月号の新聞広告。

伏魔殿市会の正体、遂に暴露される日来る！ 踊るもの市長、警視總監、市議員、怪科学者街の天使、大東京の暗黒面さながらの絵巻。（傍線引用者）<sup>⑥</sup>

広告文で傍線のように現実の東京の社会情勢と重ねあわせるような記述が見られる。これは当時の読者とこの作品とのかかわり方を

端的に表してゐるのではあるまいか。すなわち、作品で描かれるT市は、読者にとって、作者の想像の産物に過ぎない架空の都市というのではなく、むしろ逆に自らそこで生きるところの東京市そのものであった。「深夜の市長」では、T市の市政をめぐる汚職事件が描かれている。これは、結局、市会議員動坂三郎がT市長を市長の座から引きずり降ろすために企てた陰謀であった。こうした市政の腐敗は、現実と無関係な、小説独自の虚構ではなかった。

実際、「東京市会といへば疑獄を」「市魔」を連想させるやうになつた<sup>⑦</sup>というように、東京市会は汚職、不正事件が日常茶飯事のやうに起こる。「明治・大正という二つの時代はもちろん、昭和に入つてからも東京市をめぐる汚職事件は絶え間なく続き、毎日のやうに新聞紙面をにぎわしたといつても過言ではないほどであつた」<sup>⑧</sup>。

こうした「官吏商人等の不正行為の増加」は「益々一般人の探偵小説的興味を刺激」したのである。

「深夜の市長」において、市政の裏面に潜む謎に探偵役の「僕」が挑んでいくというスタイルは、当時の読者にとって入り込みやすいものであつた。読者もつ、市政への不信、市政の裏を暴いてやりたいという〈探偵趣味〉的な欲求は探偵役の「僕」に託すことができた。池田浩士氏は「海野十三が『深夜の市長』で成しとげたことは、読者のなかにある探偵趣味そのものを、いわば物語の主人公

の位置にすえたことだつたのである」という。さえない素人探偵を主人公に設定したことで「偶然」という要素が物語に介入する可能性」が与えられた。この偶然という要素が「この小説を、探偵小説のわくをこえた一種の大都市文学とし、あるいは風俗小説とし、またある意味では政治小説とも解することができるやうな作品にしたのである」<sup>⑩</sup>と評価している。まさに卓見である。「探偵小説に描かれた名探偵は優れた観察及び推理の力と、豊富な犯罪学的知識を基として犯罪の謎を解決し、チャンスとか、ラックとかによることは決して許されてない」という〈本格〉探偵小説の鉄則を破つたところに、この作品が屹立していることはいくら強調してもしすぎることはない。

またこの作品で描かれたやうな、市長が市会と対立する構図は、当時の東京市政の特徴でもあつた。「市長の選出は市会議員による間接選挙形態がとられていたため、市長の立場は非常に不安定なものであり」、市議会の第一党が交代する度に市長は追い出されたのである。しかも「中央政權の移動がその度に地方政治に反映され、就中首都たる東京市では何処よりもこの事実が激しい」というやうに、東京市議会の第一党は中央政權の移動の度に交代したのである。その結果「歴史的にみて東京市長の在職期間はきわめて短い」という現実があつた。

典型的な事件は西久保弘道市長追放劇であった。「昭和二年四月、憲政会のにぎる政府に代わって政友会系の田中内閣が成立すると、憲政会が過半数を有する東京市会は各種の圧迫をうけ、とくに西久保市長追出しの策動がなされた。」「市長退陣を迫る東京市会の政友会派に対し、退陣の理由なしとつっぱねる西久保市長の民政党派は、同年の暮れも押し寄せた十二月一日から一週間継続市会を開くという東京市会史上空前絶後の一幕をもったのである。」<sup>15)</sup> 作品中「議場は、め組の喧嘩のように殺気立っていた」(23)とあるが、実際、この会議中、議員の間で乱闘があり「大混乱の市会遂に流血ざた」となった。この作品の終盤で描かれる市会的一种異様な熱気のある場面は、当時の市会の興奮に一脈通じるところがある。

不信任案が議決されたときの西久保市長は、不信任の主な理由は妥当でないとし、「その他の理由はいづれも空ばくたるもので皆取るに足らない、殊に復興事業の遅延せるといふが如きは全く虚構のことで」<sup>16)</sup> であると語る。この言葉の真偽は別として、市長の交代は中央政権の移動によって左右されるのであるから、市長に非があらざとも、退陣を要求される。辞めさせるにはそれなりの理由がいるわけであり、その理由に根拠がない場合があったとしても不思議ではない。作品で描かれたような、市会議員が市長を辞職に追い込むために市長の汚職を捏造することは、当時の市会では十分ありうるこ

となのである。

以上、作品で描かれる市政の汚職、弾劾される市長は、作者の虚構であるどころか、むしろ現実にくらでもモデルの引き出せる、当時の市政にとっては日常的な光景であったのである。事件の顛末や「深夜の市長」、動坂三郎といった登場人物は、現実のどの事件、誰をモデルにしたとはいえない、明らかに作者の虚構である。しかし、作品で描かれた市政の腐敗そのものにはリアリティがあった。それは当時の読者にとってまぎれもなく現実そのものであった。

このように現実の東京市政と重ねあわせるような設定をすることで、読者の中にある(探偵趣味)の欲望を刺激し、読者の作品への参入を容易ならしめながらも、しかし、海野が描きたかったのは、東京市政の腐敗の現実、ではない。ましてや政治腐敗を糾弾する意図など毛頭なかつた。むしろ、これらは彼が創造した東京市ならぬT市の世界に読者を引き込むための巧みな装置であった。

### 三

物語が進行し、事件の因果関係が明らかになるにつれ、一方ではますます深まる謎がある。「深夜の市長」とその一党の存在そのものがそれである。「それにつけても、最も腑に落ちないのは、あの土窟内に住んでいる老人のことだった」(4)というように「僕」

にとつて「深夜の市長」は殺人事件の謎よりも不可解な存在であつた。ところが最後になつて「深夜の市長」が黒河内警視総監と同一人物であることが明かされる。それは別に唐突なオチではなく、注意深い読者なら当然見抜ける仕掛けになつてゐる。まず、彼らは決して同時に登場しない。他にも、彼らの癖や怪我の箇所をめぐつての伏線がいくつか張られてゐる。だが、伏線はあるにせよ、深夜のT市に君臨する謎の「ルンペン」の正体が警視総監であるというオチは、追われるものゝ追うものであるがゆえ、あまりに大胆で奇抜である。小林信彦氏の指摘するように、実はこの大胆なトリックは、モリス・ルブランの『813』（一九一〇）に先例がある。ここではルバン＝警視庁保安課長であり、つけ髭によつて変身するという趣向も同じである。海野は三二年の「探偵小説問答」（『新青年』32・8）において、「これまで読んだ探偵小説で（略）何が一番面白かつたか？」という問いに次のように答へてゐる。

少年の時、三津木春影氏の「古城の秘密」といふのを読んで、こんな面白い小説があるのかと驚嘆しました。この「古城の秘密」とは、実はルブランの『813』であることは後年金剛社のルバン叢書で知りました。

さらに、以下のように感想を述べてゐる。

怪盗が刑事部長である意外さに三嘆し、それから判らない殺人

鬼は誰だらうと躍起になりそれから最後に古城から古文書を取り出すところの素晴らしい謎の解き方に魅せられました。その感激がすつかり私を探偵小説ファンにしてみましたのです。

（傍線引用者）<sup>19</sup>

このように「深夜の市長」＝警視総監のトリックは海野のオリジナルではなく、ルブランの『813』が念頭にあつたのである。このトリックによつて「深夜の市長」の謎は解けたのであろうか。「その反語的、性格こそ素姓の知れない彼の『深夜の市長』の持つてゐる不可解なミステリーそのもの」（1）（傍点引用者）であつた。

「反語的」ということを具体的に記述した部分を挙げてみる。

顔を見ると非常に老人のように思うが、案外腕力や声は若々しく、また生活ぶりは普通のルンペンと扱ふところがないが、土窟住居には似合はしからぬ電灯だの時計だのを隠し持つていたり、教育のない口の利き方をするかと思つと、「君」といつて急に「お前さん」と云い直したり、速水輪太郎から聞き覚えたというが、ルンペンには勿体ないほどの知識を備へていたりする。（4）

要するに「深夜の市長」は相反する要素を併せもつ存在であり、この点にこそ「僕」は最大の疑問を抱いてゐるのである。例のオチによつて、先に引用した謎は一応合理的に説明できる。相反する二

つの要素を併せもっているという特徴は、「ルンペン」―警視總監という矛盾だらけの等式を考えれば当然なのである。しかし、「深夜の市長」の全貌が明らかになつたわけではない。「深夜の市長」―警視總監のオチは「深夜の市長」の「反語的性格」の謎に答えるに過ぎず、「深夜の市長」とは何なのかという根本的な謎の解答にはならない。「深夜の市長」の存在意義が解明されぬまま物語は終わりを迎える。

僕は今でも、時折思いたつては、当て途もなく深夜の街を散歩する。そんなときは、今夜こそは、「深夜の市長」にバッタリ行き逢いそうな気がするのだが、不幸にして、その後一度も彼にも彼の一党にも巡り逢つたことがない。従つて、彼等の残していった数々の謎も、いまだにやつぱりそのままになっている。

(23)

「深夜の市長」が尊敬され、彼によつて統制されているT市の〈深夜〉世界は永遠の謎となつてしまふ。この〈深夜〉世界の特徴は、その近未来的な設備にある。たとえば、〈深夜〉世界の中心的存在である高塔は、「夜明けになるとスルスルとエレヴェーター式に、地下に降りてしまふ」(21)。そのほかに「暗視機といつて、暗くても明るく見えるテレビジョン装置」(5)などが出てくる。

「僕」にとつて未知の未来科学の装置に支えられた世界は、謎の空

間として立ち現れ、「僕」に数々の謎を提供する。つまり、〈深夜〉世界は「僕」の生きる昼間のT市とは全く別の秩序で支配された異空間なのである。そして、この〈深夜〉世界は、事件解決とともに「僕」の前から消えてしまふことで、〈深夜〉世界そのものが永遠の謎となつてしまふ。

このように「深夜の市長」は〈深夜〉世界という種明かしのされない独自の異空間を創造したという点で、幻想的な広がりを持つ作品であるといえる。謎を放り出したまま作品を終えることは、「本格もの」の立場からすれば、明らかに失敗である。それどころか探偵小説としても破綻するような危険性ははらんでいる。それでは次に、何故そのような危険を冒してまで〈深夜〉世界という永遠の謎を創出せねばならなかつたのかを考えていきたい。

江戸川乱歩が「深夜の海野十三」<sup>②</sup>という追悼文で、海野とともに深夜の東京を徘徊した思い出を語つているように、海野は深夜の散歩をこよなく愛した。「深夜の市長」は彼の深夜の散歩愛好が見事に結晶したものであつた。彼にはこの趣味について書いた「深夜の東京散歩」<sup>③</sup>(36・10)というエッセイがある。

僕は深夜の、あの物静かな街頭が、とても好きなのである。そして昼間見慣れた街頭が吃驚するほど異色ある表情をして僕を迎えてくれるのが嬉しくてたまらないのである。(略)僕は、

冥途とはこんなところではないかと思うし、時には自分がもう既に死んでしまったのではないかと錯覚を起こすことさえある。なにしろ僕という男は、(略)冥途という国に、限りなき憧れを持つている人間なのである。そこはどんなに素晴らしい所だろうか。(略)僕は深夜の街頭を飄飄として流離いながら、あの世を恋うる。

海野にとって深夜は「冥途」つまり死のイメージにつながる時空間であることがわかる。興味深いのはその「冥途」が「恋うる」空間、憧れの世界であることである。

深夜の街には、深夜人種というのが確かに居る。(略)とにかく実に楽しいな表情をしている。そして非常に元気に見える。といって決して喧噪ではない。悟りきった僧侶のように物静かだ。彼等は、誰も彼もが殆んど同一の特異な人間型を持っている。そこに深夜の神秘から共通な信仰を得ているように思う。そういう意味に於て、深夜人種は立派な或る力によって、統制されているように思う。僕の書いた小説では、これが髭武者のルンペン老人として描かれているが、実は特殊な人間があるのに非ずして、それは無形の力、深夜の神秘性に外ならない。「立派な或る力によって、統制され」た世界というのが、海野の憧れる深夜であり、これを小説の形で表現したのが「深夜の市長」

に統制された〈深夜〉世界なのである。また、「深夜の市長」は「深夜の神秘性」を表していることがわかる。こう考えると「深夜の市長」⇨警視総監というオチはよさそうである。「深夜の神秘性」を表現したいなら、「深夜の市長」を特定の人物に結びつけてしまわないほうがいい。そのうえ、このオチは「無形の力、深夜の神秘性」によって統制された〈深夜〉世界が、結局は、昼の世界の権力の傘下におさまる程度のものでしかなかったことを示すものではないか。現実の中にすっぽりと入ってしまう箱庭程度の幻想世界でしかなかったのか。しかし、「深夜の市長」⇨警視総監というオチはこの探偵小説における最大の見せ場のトリックである。これがなければ最大の謎が解かれぬままになり、探偵小説として破綻してしまう。

いや、むしろ「深夜の市長」⇨警視総監という趣向が探偵小説としての柱になっているのである。ルブランの「813」に感銘を受けた海野の念頭には、例のトリックが当然あった。そうすると「深夜の市長」⇨警視総監というトリックが、この探偵小説の発想の核になったと考えることができる。そう考えると、このオチは欠点であると同時にこの小説の原点である。この葛藤は〈深夜〉世界を創造することによってうまく解決されている。つまり、「深夜の市長」⇨警視総監という奇抜なトリックで、謎に対する一応の解決を提示

した。が、先に見てきたように、このオチで「深夜の市長」の存在に関する根本的な疑問は解決されたことにはならないのである。

〔深夜〕世界がついに永遠の謎となることで、深夜は神秘性を獲得することができるのである。すなわち〔深夜〕世界を創造することによって、この小説のモチーフである「深夜の神秘性」は見事に表現されたのである。そして、〔深夜〕世界が昼の権力下におさまることを拒否するのである。なぜなら、〔深夜〕世界の謎は、「深夜の市長」＝監視総監のオチとは無関係に存在し続けるからである。これが〔深夜〕世界創造の意義である。

今日再読に耐えない海野の探偵小説群において、乱歩から「名作」<sup>②</sup>といわれ、現在も研究者に評価を受けているこの「深夜の市長」の魅力はこの〔深夜〕世界にあるのではないだろうか。〔深夜〕世界には、深夜に対する海野のイマジネーション、感性が、遺憾なく発揮されている。そしてそれは時代を越えてわれわれの感性に訴えかけるのである。

#### 四

「深夜の市長」を最後として、海野は探偵小説から離れてゆく。

三六年に「ラヂオ科学」に連載された初の長編科学小説「地球盗難」を皮切りに、空想科学的な少年小説を次々に書きあげる。乱歩

が、海野について「少年科学冒険小説を大いに書き、戦争中は、少年読物界最大の人気作家となっていた」「海野君の歿後もこの少年読者の人気はうせず、そういう著書はずっと版を重ねていた」というように少年小説界で大いに活躍する。

都市の文学である探偵小説を離れることで、作品の舞台は一変する。海野の探偵小説群に数多く見られた、ネオンの光りに包まれた怪しげな東京の夜はもはや姿を消し、代わりに異国や海底、宇宙といった空想的な世界が展開してゆく。「深夜の市長」において深夜のT市を賛歌し、都市幻想というべき世界を創りあげた海野が、なぜこれ以後東京に目を向けず、はるか秘境を描くようになったのであろうか。

この時期に少年小説を描くことは特別な意味を持った。この時期の少年小説は、当時の国策に迎合して発展した向きがある。大東亜共栄圏の構想をテーマにした小説が、少年小説の主流をなす。南方を舞台とした小説を書くことは「南進論」という国策とやはり無関係ではないだろう。実際、少年小説界における海野の活動は、戦後すぐ「軍国主義のラツパ吹きとして極めて反動的な役割を演じたと言ひ得る」<sup>③</sup>と断罪される要素を持っていた。そのようなことを承知した上で、それでもやはり、海野が舞台を南洋や宇宙に求めたのは、単に国策に迎合したと片づけられない要素を持っている、と

考える。彼が所謂少年軍事科学小説を書き始めたのは三八年一月から十二月まで「少年倶楽部」に連載した「浮かぶ飛行島」以降である。『深夜の市長』と同年に発表された『地球盗難』（「ラヂオ科学」連載期間未詳）や翌年の『海底大陸』（「子供の科学」37・4、38・12）では軍事的な要素のない、純然たる科学小説を書いているのである。『海底大陸』では海の底に潜むという伝説のアトランティス大陸をテーマにした空想的な世界を繰り広げている。

海野が探偵小説から手を引いたのは三六年であった。この頃から日本は軍国主義的な色彩が濃厚になってゆく。乱歩は『貼雑年譜』のこの年の初めに「この年二月、二・二六事件が起り、自由主義、個人主義没落の前兆既に歴然たり」と記している。それでも三六年にはまだ探偵小説は盛んに書かれていた。探偵小説専門雑誌も「新青年」のほか「ぶろふいる」、「探偵文学」、「探偵春秋」、「月刊探偵」など、数も相当多く出るやうになつた<sup>②⑥</sup>。探偵小説があからさまに敬遠されるのは翌三七年からである。この年八月、日中戦争に突入している。

探偵小説は「風俗壊乱出版物検閲基準」<sup>②⑦</sup>から取り締まることができた。特に第四項の「残忍なる事項」、第五項の「遊里、魔窟等の紹介にして煽情的に亘り又は好奇心を挑発する事項」の基準の準用次第ではたいいていの探偵小説を取り締まることができる。先に挙げ

た雑誌が次々と廃刊になってゆく中、「探偵文学」の後身であり、海野、小栗、木々の共同編集による「シユピオ」が孤軍奮闘するが、これらついに三八年四月号をもって廃刊となつた。「探偵小説専門雑誌も、これを最後として全滅した。時勢のためである。『新青年』もこのころから探偵小説誌の色彩を益々薄め、やがて十六年度（一九四一）あたりからは、全誌面から探小の影を見ぬに至つたのである」<sup>②⑧</sup>。探偵小説が売り物だつた「新青年」も「探偵小説ジャンルが戦意高揚にそぐわぬと攻撃され、秘境物、スパイ物、捕物帖へと再編成され」ることであらうじて生き残るのである。

海野が探偵小説によつて東京の裏面に潜む犯罪を描かなくなつたのは、このように時局柄探偵小説が書けなくなつたということが大きな要因である。しかし、それだけなら、まだ探偵小説が盛んだった三六年に、なぜ海野が早くも空想科学小説に着手したのかという疑問に答えることはできない。確かに『深夜の市長』は「政治小説」の要素も多分に持ち合わせているから、執筆に制約を受けたことは想像に難くない。自由に深夜の世界を書けなかつたことは、彼に痛恨の思いを抱かせたに違いない。しかしそれだけではない。現実に、海野が愛した東京の夜、幻想の母体となる深夜が消えてしまふのである。『深夜の市長』の連載が始まつた直後に、二・二六事件が勃発し、翌二七日からは東京に戒厳令が布かれる。これにより

「治安維持上の権限」が「軍司令官に移る」<sup>⑩</sup>。そして実際に治安を維持するため「帝都は多数の兵士、憲兵、警官によつて秩序整然と警戒され」た。「戒厳令が布かれた深更には弦月に青く照らし出された雪の街上に不気味な緊張が漂って灯影に歩音が立つてゐた」というようにこの警備は昼夜を問わず行われた。この重々しい空気は、同年の七月一九日に戒厳令が解除されるまで東京市中にたちこめていたのである。

深夜の東京に自分が「限りなく憧れをもつ」「冥途」の世界を重ねあわせた海野。深夜の街の静けさ、人々の穏やかさから感じられる、深夜の世界を貫くある種の統制力は、「無形の力、深夜の神秘性」によるものであり、決して警察とか軍隊といった人為的な権力によるものではない。『深夜の市長』では日常の秩序が反転した異次元の時空間を創造した。「昼間のT市とは全く別個の存在で」あり、「喧騒を極めた」昼間からは想像もつかないような「魅惑的であり神秘的であり多元的である」(1) 深夜のT市。海野にとつて深夜の東京は限りなく夢を見ることのできる、日常の束縛から解放された時空間であり、その夢をT市という設定において描き出すとしたのが『深夜の市長』であった。「僕」は『深夜』を愛し、この世界で生きることを選んだ。すなわち、昼の顔である司法官を辞め、「天下のルンペン浅間新十郎」(23)として生きる決意をした。

しかし〈深夜〉世界は「僕」の前から消えてゆく。これは作品の中だけの話ではなかったのである。

軍司令部という権力による統制は現実の東京の夜から感じることのできた異空間としての深夜を壊滅させるものであった。「ルンペン」が君臨した深夜は、警察まで権力の傘に入れた軍司令部という公然の大権力によつて支配されてしまう。これによつて、海野が憧れる深夜の世界は崩壊してしまつたのである。昼の世界の権力が決して及ぶことのない、神秘の力で統制された深夜の世界が軍靴の響きとともに崩れてゆく。深夜も昼間の秩序の中に収まり、昼の権力がそのまま深夜にも及んでしまうのである。海野が作品の中で描いた、〈深夜〉世界に見捨てられた「僕」の姿は、ロマンチズムに満ちた東京の夜を失つた海野の姿に、そのまま重なるのである。

このように現実の深夜の世界が失われていくのを、海野は『深夜の市長』連載中に身をもつて実感し、他の小説家より一步早く、幻想を託す時空間を秘境に求めた。東京の深夜が本当に軍事色に染まってしまうは、三七年に日中戦争が始まつてからのことである。その年の九月には「深夜の流し円タク」<sup>⑪</sup>が禁止される。これは「深夜の市長」で描かれた夜の世界、円タクで東京中を駆けめぐることになり立っている世界の、崩壊を象徴的に表しているのではないか。

## 五

以上をまとめると、海野が「深夜の市長」においてなしたことは、東京の深夜という失われつつある時空間を、T市という設定において描き出したことであり、この〈深夜〉世界に読者を参入させ、その神秘性を守るには、〈本格もの〉の鉄則を破る方法が不可欠であった、ということである。〈変格もの〉の可能性を「科学的論理小説」ではない方向に十二分に發揮した作品なのである。

池田浩士氏は「深夜の市長」について「探偵趣味を窮極まで追求する主人公を中途半端なところで放り出し、権力をもつ人間の恣意によって動かされる現実を追認することでしか、作品としてのましまりをつける方法を知らなかった」と述べている。③で述べたように、確かに「深夜の市長」は監視総監というオチによって、〈深夜〉世界も結局、昼の権力の傘下でしかなかった、と見ることもできる。だが、このオチに作品の限界を見るのではなく、むしろこのオチによっても、解明されることがない〈深夜〉世界創出にこの作品の達成を見たい。迫りくる軍国化の闇に深夜の東京が染められていくのを痛感しながら、それでもなお、憧れとしての深夜の世界を創出しようとした、海野の現実との対決が「深夜の市長」であり、その成果が〈深夜〉世界なのである。作品は、〈深夜〉世界が「僕」の前

から姿を消すことで、T市は昼の世界に染められてしまうところで終わっている。だが、現実の東京市は、やがてはその昼の世界として描かれた市政の汚職までも覆い隠してしまうような、軍国化の闇に塗りこめられてしまうのである。ますます過酷になる現実の中で、海野は時代といかに向き合っていたのか。戦争協力の問題も含めて、戦時下の彼の表現活動について考える必要がある。

## 注

- ① 江戸川乱歩「小栗、木々の登場——昭和九、十年度」「江戸川乱歩全集 第十三巻 探偵小説四十年（上）」（70・4・10、講談社）三二六—三七頁
- ② 甲賀三郎「梅雨期のノートから」（『新青年』15—11、34・9）
- ③ 海野十三「探偵小説管見」（『新青年』15—12、34・10）
- ④ 海野十三「科学小説の作り方」（『海野十三全集 別巻』所収、91・10・15、三一書房）一八八—一九一頁
- ⑤ 「東京朝日新聞」'36・2・4
- ⑥ 「東京朝日新聞」'36・4・5
- ⑦ 今和次郎「新版 大東京案内」東京の市政と行政（29・12・5、博文館）三三三頁
- ⑧ 「東京百年史 第五巻」第一編 帝都復興と市民生活 第四章 復興の裏に市政の腐敗（72・11・15、東京都）一七五頁
- ⑨ 平林初之輔「日本の近代的探偵小説 特に江戸川乱歩氏に就いて」（『新青年』25・4、「平林初之輔文藝評論全集 下巻」所収、75・5・1、文泉堂書店）二二二頁

- ⑩ 池田浩士「海野十三『深夜の市長』」(『Et Paris』23号、'91・9・20、白地社)
- ⑪ 小酒井不木「西洋探偵譚」(初出未詳、「小酒井不木全集 第二巻」所収、'29・10・23、改造社)二六四―二六五頁
- ⑫ ⑧に同じ、一八七―一八八頁
- ⑬ ⑦に同じ、三五四頁
- ⑭ ⑧に同じ、第六編 都制の実現と終戦の東京 第二章 戦争の生んだ都制、一二―一五頁
- ⑮ ⑭に同じ、一二―一七頁
- ⑯ 「東京朝日新聞」'27・12・3
- ⑰ 「東京朝日新聞」'27・12・9
- ⑱ 小林信彦氏はルブランの「813」のトリックを日本の探偵小説家が「転用」したとみられる例のひとつとして「深夜の市長」を挙げている。  
(『小説世界のロビンソン』'89・3・20、新潮社、八一―八二頁)
- ⑲ 「探偵小説問答」(『新青年』14―10、'32年夏季増刊号)なお、三津木春影訳の「古城の秘密」は一九二二年武俠世界社刊、金剛社の「アルセーヌ・ルパン叢書」は、一九一九年から二五年にかけて刊行されており、「813」は保篠龍緒訳である。以上、中島河太郎編『日本推理小説辞典』(85・9・30、東京堂出版)による。
- ⑳ 江戸川乱歩「深夜の海野十三」(『宝石』4―8、'49・8)
- ㉑ 海野十三「深夜の東京散歩」(『探偵春秋』'36・10)④に同じ、三三四頁
- ㉒ ⑳に同じ
- ㉓ 江戸川乱歩「探偵小説第三の山——昭和二十三年・四年度」(江戸川乱歩全集 第十四巻 探偵小説四十年(下)所収、'70・5・12、講談社)一六三頁

- ㉔ 関英雄「児童文学の展望」(『新日本文学』1―3、'46・6)
- ㉕ 江戸川乱歩「昭和十一年度」の項より(『貼雑年譜』'89・7・25、講談社)
- ㉖ 「出版界一年史」(『東京堂編 出版年鑑』'37・6・23、東京堂)一六頁
- ㉗ 「安寧・風俗に関する出版物検閲基準」(『現代史資料四〇 マスメディア統制二』所収、'73・12・10、みすず書房)三六四―三六五頁
- ㉘ 江戸川乱歩「隠栖を決意す 昭和十三・四・五年度」(㉓に同じ、七頁)
- ㉙ 川崎賢子「戦争文学」(『新青年』読本全一卷)所収、'88・2・20、作品社)一九八頁
- ⑳ 「東京朝日新聞」'36・2・28
- ㉑ 「東京朝日新聞」'36・2・29
- ㉒ 「東京朝日新聞」'36・2・28
- ㉓ 「東京朝日新聞」'37・9・25
- ㉔ 池田浩士「大衆文学も勇躍、奉公する」(『インパクション』88号、'94・10)
- 付記 「深夜の市長」の引用は「海野十三全集」第三巻(88・6・30、三一書房)によった。なお、引用資料に関して、旧漢字は新字体に改めルビを省略した。